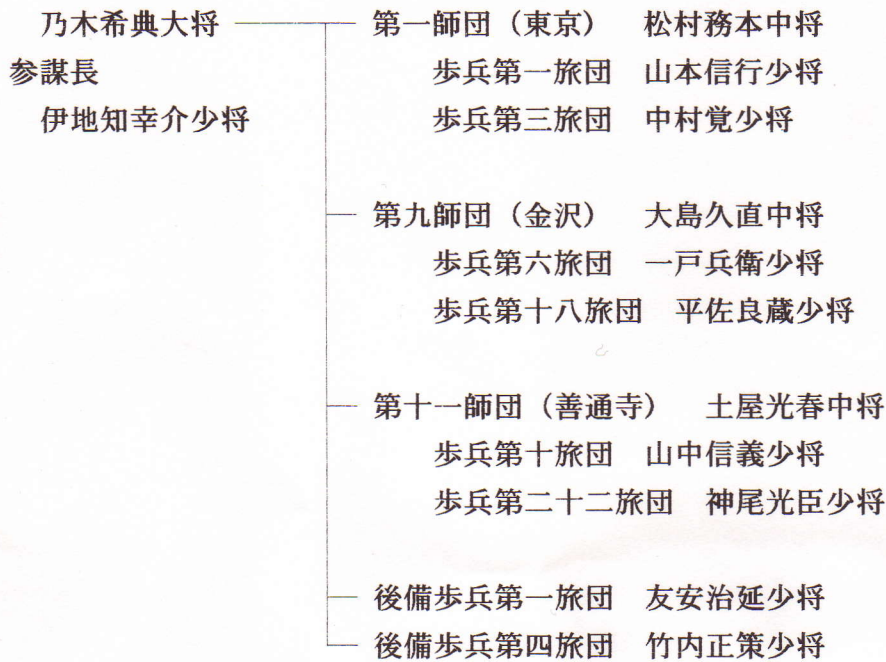


◎軍司令官



◎攻城砲兵司令部 司令官 豊島陽蔵少将
 野戦砲兵第二旅団 大迫尚道少将

第三軍・旅順攻撃の攻城砲

野戦重砲兵連隊	1 2センチ榴弾砲	1 6門
徒歩砲兵第一連隊	1 2センチ加農砲	1 6門
	1 5センチ榴弾砲	1 6門
徒歩砲兵第一独立大隊	9センチ白砲	1 2門
徒歩砲兵第二連隊		
第一大隊	1 5センチ白砲	2 4門
第二大隊	1 5センチ白砲	2 4門
徒歩砲兵第三連隊	1 2センチ加農砲	6門
	1 0・5半速射加農砲	4門
	1 5センチ白砲	2 4門
	9センチ白砲	1 2門
海軍陸戦重砲隊	1 2センチ加農砲	2 0門

*他に、戦利砲 6門、野砲・山砲 1 8 0門。機関砲4 8門（後に8 0門）

*第二回総攻撃以降、2 8センチ榴弾砲 1 8門

ロシア軍・旅順要塞守備兵力

- ◎関東軍司令官　ステッセル中将
- 旅順要塞司令官　スミルノフ中将
- 東狙兵第四師団　フォーク少将
- 第一旅団・第二旅団
- 東狙兵第七師団　コンドラテンコ少将
- 第一旅団・第二旅団
- 要塞砲兵隊　ベールイ少将

歩兵三十一大隊、騎兵一中隊、野砲兵九中隊（64門）、57ミリ砲兵一中隊（6門）、要塞砲兵三大隊、ほか工兵、鉄道兵、地雷の各一中隊。機関砲43門。

戦闘総員は歩兵2万8000名、騎兵180名、砲兵6400名、工兵1100名の合計3万5680名。非戦闘員を含めて、総計4万2500名。

機関砲の性能の比較

旅順攻略戦において、最も日本軍が苦しめられたロシア軍の機関砲（銃）。機関砲は、特に堡塁の前面および堡塁内の側防火器として猛威をふるった。当時、機関砲は一門で歩兵二個中隊に匹敵すると言われていたほど、その火器としての威力は絶大であった。

ところが、どうしたものか、日露戦争の当初、日本軍は機関砲を持っていなかったという俗説が信じられている。桜井忠温は『肉弾』で「我らの最も恐るべき火器」といい、陸大教官で日露戦史の専門家の飯村稷でさえ、「ロシア軍は、わが軍のもっていなかった機関銃をもっていた」と公然と書いている。まったくの虚構だ。すでに南山の戦闘では、日本軍はロシア軍の五倍近い機関銃を投入している。

●ロシア軍の機関銃は、マキシム式で、水冷・後座式であった。口径は7・6ミリ、射程距離1920メートル、発射速度は毎分300～400発。

●日本軍の機関銃は、ホチキス式といい、空冷で非後座式であった。口径は6・5ミリ、射程距離2000メートル、発射速度は毎分500～600発。

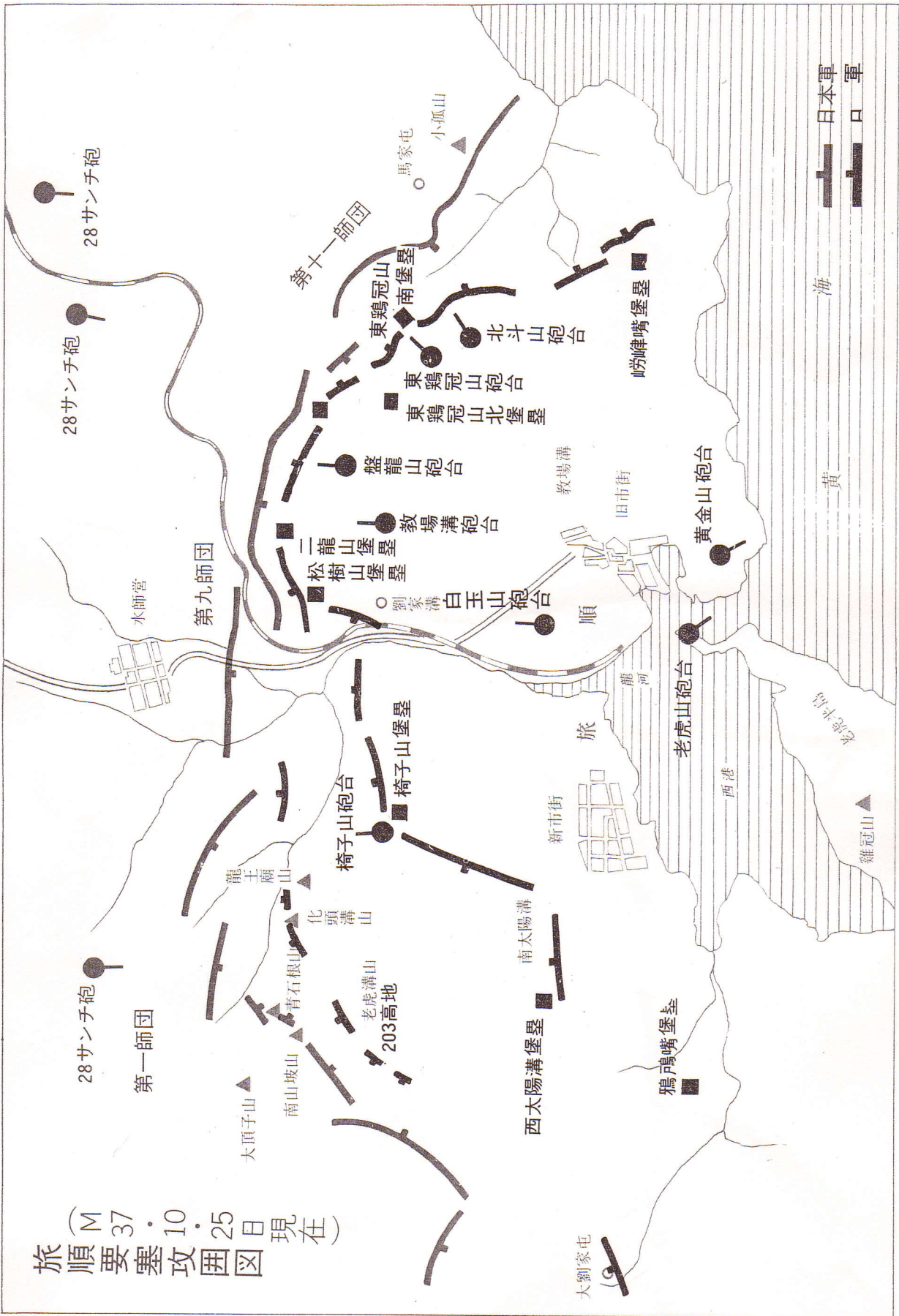
ロシア軍のものより遥かに優秀である。第三軍は、第一回総攻撃では48門を投入し、一旅団ごと、ほぼ6門の割合で装備していた。その後、逐次増加され、第三回総攻撃では総計80門を数えている。

日本軍は性能・数量とも勝っていながら、機関銃の取り扱いに精通しておらず、故障ばかり起こして、ほとんどその威力を発揮しえなかった。これに対し、ロシア軍は機関銃の使用が実に巧みであった。堅固な掩蓋の下や堡塁の銃眼から、丸裸同然に突撃してくる日本軍を斉射するのだから、その効果は絶大であった。事実、第一回総攻撃における日本軍の死傷者1万5000余のうち、70パーセント以上が銃創（小銃・機関銃の傷）で倒れたと記録されている。

凶暴限派軍のシロ

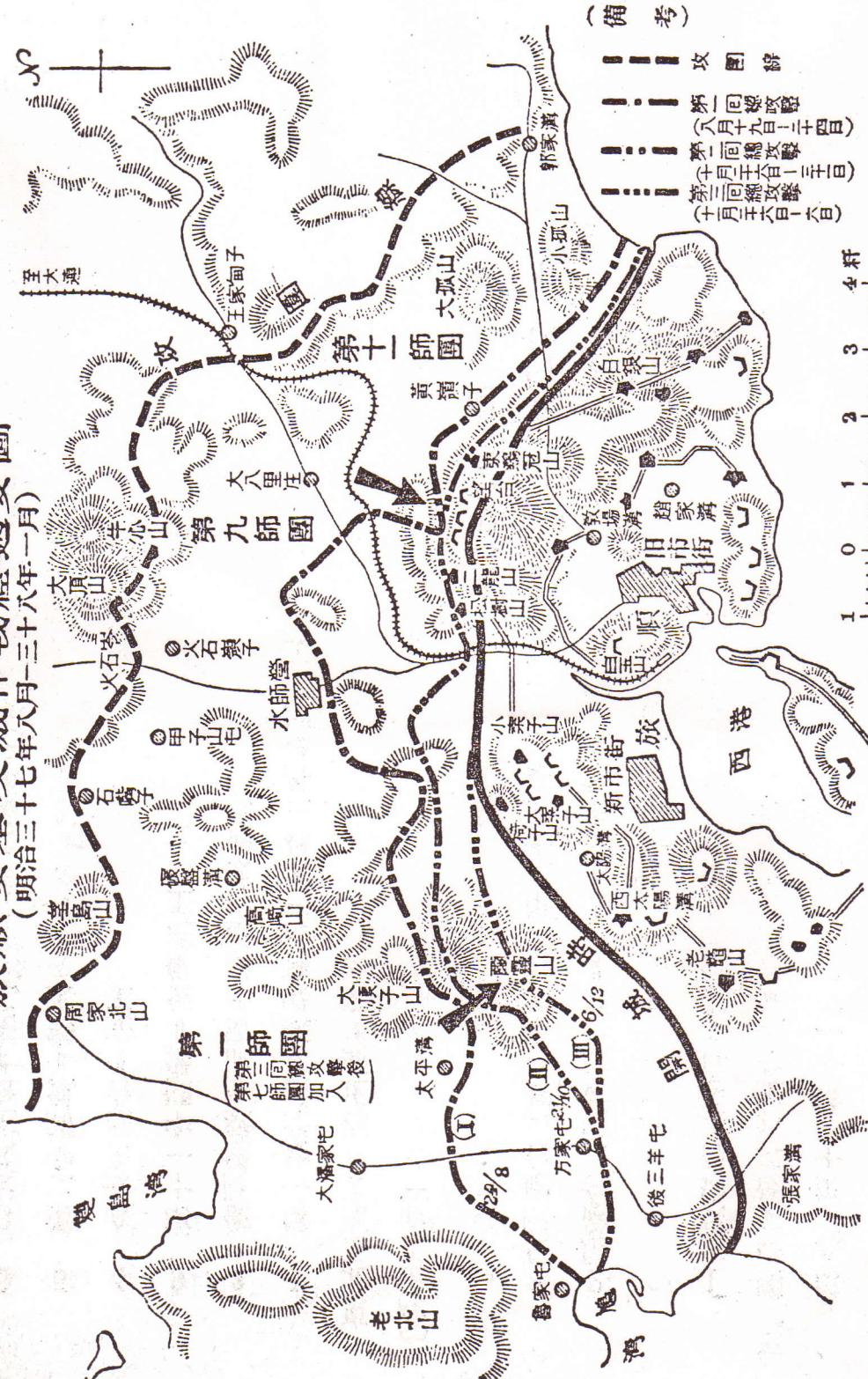


旅順要塞攻圍圖(現在) (M 37 · 10 · 25)



旅順要塞攻城經過要圖

(明治三十七年八月一—三十八年一月)



- (備考)
- 攻圍線
 - · — · — · 第二回總攻撃 (八月十九日—十四日)
 - · — · — · 第二回總攻撃 (十月五日—十五日)
 - · — · — · 第三回總攻撃 (十月十六日—十六日)



旅順要塞の砲台

『戦争史概観』四手井少将著より